

# ノーサイド

## 禍害と被害を超えた論理の構築

### (20)

## 中村周平

立命館を卒業して2年…「卒業式に来るのもこれが最後かな。」就職、進学、起業…それぞれ違う形の夢を追い、晴れやかな顔で大学を巣立っていく後輩たちを見送りながら、そんなことを思っていました。お世話になった教職員の方々も相次いで退官・退職されることになり、いよいよ大学との繋がりも少なくなっていきました。

そんな分かれのシーズンを終え、新しい年度を迎えました。同志社大学の川井圭司先生とは、その後何度かメールを交わし、ゴールデンウイーク明けの週からゼミに行かせていただくことになりました。もう行くことはないと思っていた大学…それも他大学の門をくぐることになるとは。人も環境も、まったく繋がりがないところに飛び込むことに多少の躊躇はあったかもしれませんが、立命館を出てから止まっていた事故と向き合う時間がまた動き出そうとしていることに様々な想いを巡らせていました。

「最初はゲストスピーカーとして来てもらうことにしましょう。突然、ゼミに参加するよりそちらのほうが入りやすいと思います」、川井先生の計らいで3、4回生のゼミでプレゼンをさせていただくことになりました。川井先生のゼミ(以下、川井ゼミ)は、スポーツ法政策をテーマとして取り扱っていることもあり、体育会所属の学生やスポーツ経験者の学生が多く在籍していました。スポーツへの関心が高い、中

には生活の一部となっている方を前にスポーツ事故の現状を伝えることは、どうしても一つひとつの言葉や表現に気を取られてしまいます。ただただ、スポーツに対する批判に繋がってしまったり、本意が伝わらず事故の「被害者」とでしか思ってもらえないことも考えられるからです。また、これからお世話になる(ゼミに参加させてもらう)うえでも、同志社大学、そして川井ゼミに来た目的や想いを十二分に伝えたいという考えもありました。

「カッコつける必要も、卑下する必要もない。ここで学ばせてもらえるチャンスももらえて。自分がここで沢山のことを学びたくて。それさえ伝わってくれたら…」。上手く伝えることよりも、気持ちを出し切ることを考えました。緊張しすぎてお腹が痛くなるのは毎度のこと。この日は口がパッサパサになりましたが、両ゼミの学生の方に精一杯の想いは伝えることができたと思います。そして、川井先生からゼミに迎え入れたいというお話がありました。年齢も大学も違い、また突然現れた車いすのおっさんを温かく迎え入れてくださった川井ゼミの皆さんには今でも本当に感謝しています。この日から、私にとって第二の大学生活(モグリ)がスタートしました。

翌々週から、二週間に一度のペースでゼミに参加させていただくことになりました。ゼミでは、週ごとに担当となった学生の方々がスポーツに関する新

聞記事を持ちより、その記事からそれぞれが感じた課題を抽出。その課題について、ゼミ全体で議論し合う形式を取られていました。「八百長」、「スポーツ賭博」、「プロスポーツにおける契約問題」、「スポーツ選手のセカンドキャリア」、次から次に出てくるスポーツに関する記事、そして交わされていく議論。オリンピックやW杯などテレビで放映されるものは人並みに観ていたつもりです。また、ラグビーを始めてからスポーツへの関心は大きくなっていったと思います。それでも、聞いたことのないスポーツに関する取り組みや、テレビなどで耳にしていることであってもその裏をかいた濃密な議論など、初めて気づくこと、学ぶことばかりでした。PLAYスポーツとSHOWスポーツという視点、スポーツビジネスやスポーツによるまちづくりといったスポーツを一つのツールとして捉える考え方、日本と海外におけるスポーツの捉え方や位置づけの違い。ただ一言に「スポーツ」と言っても、こんなに多くの考え方や捉え方があることに大きな驚きを感じていました。

あまりにもスポーツに関する知識が乏しかったため、せっかく参加させていただいているにも関わらず、議論に参加できないことが多々続きました。「せっかく機会をもらっているのに、一つも発言できないなんて。せめてちょっとでも知識を、情報を…」、参加した時のゼミでの学びを少しでも吸収しようと、必死に内容を抑えていきました。そして、次第に「もっと学びたい」という意欲が自然に掻き立てられていきました。川井先生のゼミの運営やゼミ生の方々の積極的に参加される姿勢がそうさせてくれたのだと思います。3時間という限られた時間の中で、充実感というものを久しぶりに感じていました。

また、3回生のゼミではプレゼンの機会もいただくことができました。川井ゼミでは新聞発表のほか、テーマ別に分かれてスポーツの諸問題に関するプレゼンも行われていました。「オリンピック・W杯といった国際ビッグイベント」、「八百長、スポーツ賭博」、「スポーツ選手のドーピング問題」、「大学スポーツの国際比較」、そのようなテーマの中に「スポーツ事故」というテーマに関心を持つ学生の方三人

とプレゼンさせてもらうことに。「集団でプレゼンするなんて立命の学部ゼミの時以来やわ。懐かしい以上にちゃんとできるかなあ」、発表の日が近づくにつれて緊張と不安が増していくのが自分でもわかりました。また何より「スポーツ事故」というテーマを共有することにある不安を感じていました。一緒に発表をさせていただく三人は、共に体育会クラブに所属しておられ日々スポーツと学業の両立に励まれている方々でした。スポーツと密接に関わられている方々に「スポーツ事故」を考えていただくことが、クラブ活動へのモチベーションや怪我に対する認識に悪い意味で影響しないかと危惧せずにはいられていませんでした。そんな不安をうち消してくれたのは、プレゼンに向けて行なっていたミーティングでの三人の姿勢でした。今出川と京田辺のキャンパスを頻繁に行き来する忙しい中を縫って、ゼミ以外に内容を討議する時間を設けてくれました。そして、自分たちのやっているスポーツに多いけがの種類や、ご自身の怪我の体験談、練習中に誤ってチームメイトに怪我をさせてしまったことなどを積極的に話していってくれました。そのおかげで、軽度傷害と重症・死亡事故には大きな違いがあること、事故被災者や家族にとって経済的な支援が必要である実態と不足している現状など、私自身の事故の経緯を包み隠さず伝えることができました。プレゼン直前のミーティングでは、立命館の修士論文にも目を通していただき私の今の事故への捉え方や想いも知っていただくことができました。

隔週で…ということスタートした第二の大学生活。川井先生、そして川井ゼミの学生さんたちの存在が、いつの間にか毎週のようにゼミに参加しようとキャンパスに自分を向かわせてくれていました。